

方向

第九四号 一九八九年二月一二日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

岸壁の群世

1989.1.

柴野純孝

行く手の北側には西へ向かって岸壁がえんえんと続いており、それに対し南側には岸壁とは数十米の空地を隔てて倉庫の群が立ち並んでいる。

その門司港の岸壁と倉庫群との間を、西へ向かって脇目もふらず懸命に急ぐのであった。時は昭和十九年十一月末の或る日の午後の事である。空はどんよりと曇り、寒い北風が吹きすすきで、そのうえここは一般人の立ち入り禁止区域でもあるせいにか、皆目人影らしいものはない。それでも進むにつれて接岸している船舶の姿がぼつぼつ見えてきた。

船の姿が見えてきたのでいささか気持が落ちついたようだ。と云うのは今日の外出の目的は、その中の一隻を探し尋ねて、無二の戦友丸山君に会うことであつた。そして彼の乗っているハワイ丸をさがしながら今こうして急いでいるのであつた。公用腕章をつけてはいたが勿論まったくの私用であつた。

百米程の距離をおいて岸壁に横づけになっている船の、船名を一つ一つ確かめながらいくのであつたが、ハワイと云う名前から推測するに、並の船ではなく、外洋航路の大船と云う予感があつた。かくして数隻の船を通り越して進んだ時、前方に一際大きな船の姿が見えてきた。

「きつとあれだ。」 足が自然に速くなった。ところが、その大船から百米程手前に来た時、突然なにか黒々とした異様なものが目に映ったのである。

その場所は解用の岸壁であった。長い岸壁の所々で解等の荷役のために、内側へ一米程ひっこんでおり、幅一米位、足場までの深さは一米半位であった。

一体何であろうか。遠くから一見すると、タールの大きな汚れのようだが、ちよつと真上まで来た時、それは刷毛のようなもので書きなぐった文字らしいものに見えるのであった。ちよつと好奇心めいたものが湧いたが、今ハワイ丸を眼前にして、そんな事にはかまっておられない。

急いでそこを通りすぎた頃から、風の音に交って遠雷のようなものが聞こえてくるのであった。「あれは」「そうだ、エンジンの音だ」。船はもうエンジンの始動を開始しているのだ。出航は間近なのだ。その音かられるようにして急いで大船の下にたどりついて見上げると、果たしてハワイ丸であった。

いま呼べば答えるところに丸山がいるのだ。彼の笑顔が見えてくるようだ。感情が高ぶらざるを得ない。しかしタラップのある船の真横に近づくとつれて轟々とひびくエンジンの音は耳を聳るように威圧感を与えてくる。けおされまいとして、タバコを一本だして火をつけた。やがてタバコも吸い終ったので、やおろ気を取り直してタラップを昇り始めるのであった。

他人の家へ無断で入るような気分である。まもなくタラップを昇りつめて昇降口に達した。ところが妙な事に、数千の兵が乗っている筈なのに、それらの行き交う姿は殆ど見られない。おそらく万端の準備が完了したので船

倉の定位置に坐り、今はもう、ただ出航を待っているに違いない。

出航はすべて封緘命令による。尋ねるすべのないことであり、まして私用でやって来た一兵卒には分ろう筈ない事なのである。思い切つて船砲隊を尋ねてみようかと考えてもみるのだが、過去の経験の数々からして、到底そんなところへ今のこのこと入っていけない。

彼らはいま、臨戦態勢にはいつているのである。エンジンの始動、部隊のたたずまい、こんなことでは、何時タラップが揚るか知れない。タラップが揚れば万事窮すである。

そんな不安にかられて、しばらく昇降口にたたずんでいたのであるが、遂に戦友との再会を断念して、後髪をひかれる思いでタラップを降りはじめた。途中、また一度、甲板まで戻ってみたものの、所詮なす術のないまま、再びタラップを降りるのであった。

岸壁に降り、タバコに火をつけ、吸いながら、重い足取りで先程やって来た道を、今度は東方に向つて、呆然とした思いでたどる。そして、時々振り返つて、段々遠のいてゆくハワイ丸の戦友の武運を念ずるのであった。

ところが、そのしばらく後に、思いもかけない事がおこつた。突然、うつろな眼に、何かが入り、とたんに意識が戻つた。それは、先の解岸壁の大きなタールの文字であった。

すぐ下の足場に飛び降り、それらの文字を確かめ始めた。分かり易い文字から段々解読してゆくと次のように読めた。

かえらじとかねて思ひし梓弓なき数に入る名をそとどめじ

読み人知らず

それは楠正行が出陣の折り、如意輪堂の扉に残したと云われる辞世を少しもじったものであった。最初ちよつときざに感ずるのであったが、段々残した人の氣持ちがうなずかれて何か胸につきさすようになった。

およそ、ここ門司港から、あるいはここを通過して、幾百万の兵士が戦地へ向かったことであろう。そして幾百万の兵士は再び祖国にまみえることができなかったのであつた。あの岸壁のタールの文字も日ならずして風雨に消されたことであろう。また見る人も殆ど無かつた事であろう。海の彼方へ消えていった草々の民の名前などは残る筈はなく、また残そうとする者もないであろう。所詮そんな事は望むべくもないことである。

ただ、二度と帰れない旅路へ船出するいまはの一瞬の時をとらえて、切々たる祖国への思いと、自己の語る事もできない空しい思いを、あの正行の辞世を借りて残したのであるか。

あの岸壁の辞世を思いだすたびに、不運な最後を遂げたハワイ丸のことが憶いだされ、戦友丸山君の事がしのばれて、長明氏ではないが不請の念佛をもうす此頃である。

※右の文章にそえられた手紙と、当時のわたしの記録（『幻の葡萄』所収）を節録する。（原田）

拝啓　：かねてハワイ丸に関心をもっていたのは丸山君が乗っていたからです。連絡班長（部隊長）の当番兵だった吉田君が公用でハワイ丸に行つたところ、丸山君に出会い「今度は最後になるかも知れない。柴野君によろしく云つてくれ」とことづけられ、次の日、知らせてくれたのです。小生そのとき炊事当番で、体があかなかつたのですが、数日のちにもまだハワイ丸が岸壁にいと聞き、炊事班長の公用腕章を借り、ハワイ丸にかけた

のですが、時すでに遅く、面会を断念して、空しく帰った次第でした。

さきごろ貴兄がその船団に参加し、一時ハワイ丸に乗船せられたことを聞き、誠に奇なるかなと思つた次第です。後日譚として、南方ニューギニヤで一緒におつた日沖小隊の連中が一月か、二月の初め頃、門司港の郵便ビルに滞在していると聞いたので、出かけて話し合つたところ、彼らもあのハワイ丸と同じ船団で出かけたとの事で、ハワイ丸の壮烈な最後の模様を細々語ってくれました。そのとき彼らの乗つた船名を聞いたところ、普通の船名とは違つたまったく聞き馴れない名前でした。クライド丸というのもあつたが、日沖小隊の乗つたのは江の浦丸に違いないと今でも思っています。丸山君は長野県諏訪郡富士見の、吉田君は福島県須賀川の人で、吉田君も故人となりました。原田大兄

一九四四年十月九日。たぶん、この日、わたし（原田憲雄）は中部第三七部隊から敢第一〇二七三部隊に転属の内示を受けた。転属先の正式名称は第一〇方面軍（台湾軍管区）第六六師団衛生隊。中部第三七部隊で編成した。部隊長は中佐。部隊本部は中尉の副官に事務の下士官・兵約四〇名、大尉を長とする軍医・衛生下士官・兵が約一〇〇名。担架中隊が三個中隊。中隊は本部と二個小隊で中隊長以下九八名（将校三、下士九）。六〇〇名に満たぬ小部隊で、私は第二中隊の第一小隊長であつた。十一月下旬、京都を出発。門司市内の民家に分宿し、乗船を待つた。三十日、ハワイ丸と江の浦丸に分乗した。部隊本部と第一、二中隊がハワイ丸、第三中隊と軍医・衛生下士・兵の約十名が江の浦丸であつた。ハワイ丸は、柴野君の文にいうとおり、船体が美しく船足の速い戦前の外国航路を往復した船だが、江の浦丸は物資が欠乏するようになってからの規格船、つまり辛うじて用を

果たせばよいといった程度の、粗悪な船足のにふい船だった。出発の直前になって第二中隊と第三中隊を入れ換えることになり、わたしたちはハワイ丸から江の浦丸に移った。第三中隊長は才気にたけ、副官とも親交があった。乗船後の半日に画策したのだ。第二中隊長は温厚で、人づきあいはあまり上手でないので、気づかぬうちに事柄は決定したらしい。乗換が終わった時、また衛生兵の二、三名がいれかえられ、ハワイ丸へ行く兵が、江の浦丸に移る兵に「お前の船が沈んだら念仏をとなくてやるからな」と冗談を言い、言われた方は本気で地だんだをふんだ。

江の浦丸は、船倉の再下層に弾薬や重油を積み、その上から甲板までの空間の船腹側を三段に仕切って人員を詰め込み、中央の広場に馬をつないだ。三段の各層は高さが一メートルほどしかなく、人は坐るかしゃがむかしなければならず、横になるだけの面積は与えられていなかった。一時間ほどすると、人馬の汗、馬糞、吐物の臭いが充満した。将校には、三時間おきに一時間の対空・対潜水艦監視の当番がまわってきた。船橋に立つ。わたしはふしぎに酔いもせず、きびしい潮風に吹かれることも苦にならなかった。

十二月一日の夜。三回目の当番を終えて下に降りると、ふいに「ドカーン」と大きな音がし、甲板がさわいだ。と思うと船倉の人達はわれ勝ちに甲板にはい上がった。わたしは最後だった。「アメリカの潜水艦だ」と口々に言っていたが、そうではなかったらしく、船員が「兵隊は下へ下りろ」と叫んでいた。

二日未明に、また「ドカーン」と大きな音がした。さきには落ちて着いていたのにこんどはぶるつとぶるえた。それでもがまんして、皆が上りきるのを見とどけて甲板に上がると、ハワイ丸がものすごい火花を天に噴射しな

から沈んで行くところで、さらに向うにすでに船体の見えなくなった火の山が水面を沸き立たせていた。

江の浦丸は黒い煙を苦しげに吐きながらのろろ走る。魚雷が鋭い水脈を引いて何本も何本も追っかけてくる。船腹すれすれに通りすぎる。江の浦は全速力で走っているに違いないのだが、はなはだ鈍くさく、見ていてじれったく、ハワイ丸の轟沈が今にもわがこととなると思えば、魚雷の一本ごとに肝を冷やし、ほっとした。船団の他の舟は見えなかった。五島列島の南方海上のことである。

よろよろとあちこち逃げまわりながら、七日ごろ大島の名瀬（？）にたどりつき、ここで一日碇泊する。

十一日。江の浦丸は台湾の基隆港に入った。湾内には沈んだ舟のマストが林立していた。江の浦丸は、それらをかきわけるようにして接岸した。目に入る風景は、中国で見たものに近く、雑然と明るかった。

柳田 聖山 『一休 良寛』 『沙門良寛』 1939.2.2. 原田憲雄

前者は『大乘仏典』中国・日本篇の第二六冊として一昨年、後者は単行本で先月、刊行された。前者は、ふたりの漢詩作品の全部の訓読に、平明な散文訳をそえ、訳注を巻末に一括し、解説・年譜をそえる。後者はへ自筆「草堂詩集」を読む」と副題し、洛北の野仏庵での講義をまとめ、原詩は自筆の写真を挟み、訓読・口語訳も掲げたうえで、一首々々の成立の事情や背景を語りながら、良寛の生涯を描く。

一休はトンチ話の主人公として、良寛は子供とマリつく童話的人物として有名すぎる。それはそれで意味があり、排斥することもいらぬが、ふたりは禪僧であり、考えを言葉で現わすことを思想といってよいなら、思想家

であつて、禪僧・思想家としてのふたりの姿は、これまでほとんど無視されてきた。ふたりの思想表現としては漢詩はもつとも重要なもので、これを正當に理解し、評価しようとする著者の数々の作業のなかでも、この二冊は著しいものであろう。一休については『沙門良寛』と同じ出版社から『一休「狂雲集」の世界』が出ている。

良寛という人は、自分を語ることがない。自分を語らなかつたから、沢山の逸話が生れます。…じつをいいますと、良寛はいつも自分を歌っている。漢詩という隠れみものによって、さりげなく自分を語っています。そこで彼の詩集がなぜ「草堂詩集」と名づけられたのか、というところから探求がはじまる。

『法華経』の「信解品」に有名な長者窮子の譬えがある。父にそむき家を出、放浪し、落ちぶれて帰ってきた息子は、長者になつた父を見分けることができず、その威容を恐れて逃げる。父は息子であることを知り、息子と同じようなボロに身をやつし、近付き、言葉巧みに子を誘つて草の庵に住まわせ、いやしい仕事をあたえ、だんだんに教育し、二十年後に親子の名乗りをするという話である。この草の庵をすこし変形したのが「草堂」であり、父なる仏を恐れながらも渴えるように父なる仏を求めるテーマが良寛の詩集の名に秘められているのだという。

良寛はひたすら『法華経』により、さらに『法華経』の文学性をすら捨てて、ブツダの一介の遺弟として、只の沙門となる。そんな沙門良寛が、漸く飯の草庵とするのが国上山の麓にあつた、中興万元の五合庵でした。五合庵の名は、本山上寺から、墓守の万元に与えられた、五合の玄米に由来しますが、良寛は草庵を借りるだけで、毎日托鉢して暮らすのであり、一切の宗門とのかかわりを捨て切つた、新しい後半生が、

漸く始まるわけでしょう。

そうして五合庵は、かれにとつての寿藏であり『草堂詩集』は寿塔に当たるだろうという。

寿塔というのは、生前につくる墓塔のことですが、良寛はもちろん、石の塔をつくりはしない。…寿塔は古代中国に始まる、寿藏の歴史をふまえます。政權交代のはげしい古代中国で、新しい支配に随うことを潔しとせぬ、前代の良心的な生き残りが、みずから姿を隠す穴ぐらを、特に寿藏と名づけるのです。…寿藏は単なる個人的な良心の、保身の場所というよりも、…高貴な伝統を残す知恵なのです。

伝記や、詩句解釈での、さまざまな創見が、この史観を拡充し、平板であった従来の良寛像が、にわかには生きいきと起ち上がった感じがする。

仏教史に良寛の名が見えず、思想史に兼好が無視され、文学史が漢詩・漢文を軽視するのが、日本の近代であった。その粗雑さへの反省が、このような労作の実現を可能にしているのであるか。

一一一

止

一一二

註明

一 法華經巡礼 261

1999. 2. 4.

原 田 憲 雄

2.4. さて、その会衆には、アージュニヤータカウンディニヤをはじめとするアラカンで煩惱尽き、自在を得た千二百人、その他の声聞衆を志すピク、ピク尼、男の信者、女の信者、また独覺衆に旅立った者がいて、そのすべてがこう考えた――

いったいどんな理由、どんな原因があるのだろうか、世尊がこよなく如来の巧みな方便を称讚し、このわたしによって覺られた法は深遠だ、と稱讚し、それは一切の声聞や独覺には知りがたい、と稱讚されるのは、世尊が、解脱はただ一つ、といわれたからには、われわれもまた仏の法を得た者であり、涅槃に到達した者であるはずだ。だのに世尊がこのように言われる意味がわからない。

そのとき長老シャーリプトラは、これらの四衆の疑惑とためらいを知り、かれらの心の中をこころに察し、自らも法についての疑いが生じたので、そこで世尊にこういった――

世尊よ、どんな理由、どんな因縁で、世尊はこよなく何度もなんども如来たちの巧みな方便、知見、説法を稱讚されるのか、わたしの法は深遠だとか、多くの意味をこめた言葉は知りがたいとか、何度もなんども稱讚されるのはなぜですか。わたしは世尊からこのような法門をこれまで聞いたことがありません。世尊よ、この四衆は疑惑とためらいに陥っています。どうか世尊よ、説いてください、如来が多くの意味をこめた如来の深遠な法を何度もなんども稱讚されるのはなぜなのかを。

atha khalu ye tatra parsat-samnipāte mahāśrāvakā ajñātakaṇḍinya-praukhā arhantaḥ ksīnāsraṇā dvādaśa vasiḥhṭa-śatāni ye cānye śrāvakayānikā bhikṣu-bhikṣuṇy-upāsakopāsikā ye ca pratyekabuddhayāna-samprasthitāḥ teṣāṃ sarveṣāṃ etad abhavat/ ko nu hetuḥ kiṃ kāraṇaṃ yad bhagavān adhi-mātram upāyakaṃśalyaṃ tathāgatānāṃ samvarṇayati/ gambhīraś cāyaṃ mayā dharmo 'bhīsamuddha iti samvarṇayati / durviññeyas ca sarva-śrāvaka-pratyekabuddhair iti samvarṇayati / yathā tāvad

bhagavatā ekaiṣa vimuktir ākhyātā yayam api buddhadharmānām lābhino nirvāṇa-prāptāḥ / asya ca
 vayan bhagavato bhāsitasārtham na jānīmah ||
 atha khalv āyusmāḥ śāriputras tāsāṃ catasrṇām parsadām vicikitsā kathāmkathām viditvā cetasa-
 iva cetāparivitarṇam ajāyātmanā ca dharmasaṃśaya-prāptas tasyām velāyām bhagavantam etad
 avocāt / ko bhagavan hetuḥ kaḥ pratyayo yad bhagavān adhimātram punaḥ punas tathāgatānām upāya-
 kauśalya-jñāna-darśana-dharmadeśanām saṃvaranayati / gambhīras ca me dharmo 'bhisambuddha iti /
 durvijñeyam ca saṃdābhāṣyam iti punaḥ punaḥ saṃvaranayati / na ca me bhagarato 'ntikād evamrūpo
 dharmaparyāyah śruta-pūrvah / imās ca bhagavaṃś catasrah parsado vicikitsā-kathāmkathā-prāptās
 tat sādhu bhagavān nirdiśatu yat saṃdāhaya tathāgato gambhīrasya tathāgatadharmasya punaḥ punaḥ
 saṃvaranām karoti ||

「乗」とは、乗り物の意。「声聞乗」は、声聞、すなわち仏弟子、が修行してアラカンとなる道であり、「独
 覚乗」とは、独覚、すなわち師につくことなくひとりで覚る者、としての涅槃に到る道である。「自らも法につ
 いての疑いが生じた」というのは、シャーリプトラは聡明な人だから釈尊の教えはほとんどつねによく理解した
 が、他の弟子や信者が理解できないとみたときは、かれらを代表して質問し、教えの意味するところを明らかに
 するよう努めた。しかし、このときは、シャーリプトラにも理解できなかった、というのである。

2.5. よて長老シャーリプトラは、そのときこの偈を述べた。

きょうの今、はじめて人間の太陽は、このような話をされる、
はかりしれない力と、解脱と、禪定を証得した、と。(22)

覺りの壇を称讃される、質問する者もないのに。
多義の言葉を称讃される、だれも質問しないのに。(23)

質問がないのに発言し、じぶんの修行を称揚される。

智慧の成就を讃嘆し、その深遠を語られる。(24)

いまや疑惑が生まれました、自在を得、煩惱なく、

涅槃へと旅立つ人に、なぜジナはこんなことを言われるのか、と。(25)

獨覺の覺りを求める人たちも、ピク尼も、ピクも、

天、龍、ヤクシャ、ガンダルヴァ、マホーラガたち。(26)

たがいに話してみはするが、兩足の尊い方を仰ぎ見て、

ためらい、疑う。どうか説明してください、偉大なムニよ。(27)

ここに在るすべてのスガタの弟子たちのうち、

わたしは彼岸に達したと、聖仙は説かれましたが。(28)

わたしには疑わしいのです、この自分の在り方も、人間の最高の方よ、

そのときわたしに示された行法は、涅槃にとっての究竟のものか。(29)

雷の太鼓のようなすばらしい音声をもつ方よ、お説きください。この法をそのままに。

ジナのまことの子供らが、ジナを仰ぎ見、合掌している。(30)

天、龍、ヤクシャ、羅刹たち、幾千万億ガンジス河の砂の数、

また、無上道をこいねがう八万ばかりの人々など、いっぱいいます。(31)

土地を統べ、戦車うごかす王たちが、千万億の諸国からやってきて、

みな合掌し、うやうやしく待っています、修行完成の道を求めて。(32)

atha khalv āyusmāñ śāripuṭras tasyām velāyam imā gāthā abhāsata ||

cirasvādya narāditya idrśīm kurute kathām /

balā vimokṣā dghānās ca aprameyā mi sparśitāḥ || 22 ||

bodhimandam ca kīrtesi prechakas te na vidyate /

sandhābhāṣyam ca kīrtesi na ca tvām kasci prechati || 23 ||

aprechito vyāharasi caryām varnesi cātmanah /

jñānādhigama kīrtesi gambhīram ca prabhāṣase || 24 ||

adyeme samśaya-prāptā vaśībhūtā anāsravāḥ /

nirvāṇam prasthitā ye ca kim etad bhāṣate jinah || 25 ||

pratyekabodhi prārthenti bhikṣuṅyo bhikṣavas tathā /

devā nāgās ca yakṣās ca gandharvās ca mahoragāḥ || 26 ||

samālapanto anyonyam preksante divipadottamaḥ /

kāṭhāṅkathī vicinentā vyākuruṣva mahāmune || 27 ||

yāvantaḥ śrāvakāḥ santi sugatasyeḥa sarvaśaḥ /

ahaṃ atra pārami-prāpto nirdistāḥ paramarṣinā || 28 ||

mamāpi saṃśayo hy atra svake sthāne narottama /

kiṃ nisthā mama nirvāṇe atha caryā mi darsitā || 29 ||

pramuṅca ghoṣaṃ vara-duṇḍubhi-svarā udāharasva yatha esa dharmah /

ime sthitā putra jinasya aurasaḥ vyavalokayantaś ca kṛtāñjali jinaḥ || 30 ||

devās ca nāgās ca sayakṣarākṣasāḥ koti-sahasrā yatha ganga-vālikāḥ /

ye cāpi prārbhanti samagrabodhim sahasraśītib paripūrṇa ye sthitāḥ || 31 ||

rajāna ye mahipati cakravartino ye āgatāḥ kṣetra-sahasra-kotibhiḥ /

kṛtāñjali sarvi sagauravāḥ sthitāḥ katham nu caryāṃ paripūrayema || 32 ||

「ビク尼も、ビクも」漢訳ではすべて「比丘、比丘尼」とする。ここは韻文だから、押韻の都合ということもあろうが、男女を並べて挙げる場合、梵文仏典ではしばしば女性を先立てる。この現象を根拠に、シャカ族は男系尊重のアーリヤ民族ではなかったろうと推測する学者もいる。(28)の「わたし」はシャーリプトラを指す。(29)後半の「そのときわたしに示された行法は、涅槃にとっての究竟のものか」は、いまのわたしの到達し

た境地は究竟の涅槃でしようか、それとも二乗（声聞・独覺）の者にふさわしいものとして示された行法を修了したにすぎないのでしょうか。というほどの意であろう。（32）の「修行完成の道を求めて」は、直訳ならば「われわれはどうすれば修行を完成させることができようか」である。223の *dharmas* は底本のまま写したが、これは誤植で、ローマ字本の示すように *dharmas* が正しいだろう。ただローマ字本は「本書におけるローマ字転写は、写本のままに表記しており、著者による校訂は加えられていない」というが、K n本に關してはしばしば注記を加えずに校訂している。あるいはK n本は「写本」の範囲外とするのだろうか。わたしも今後、K n本の誤植と察せられるものは、ことわりなくローマ字本に従う。

2.6. このようにいうと、世尊は長老シャーリプトラに次のことを告げた――

やめなさい、シャーリプトラよ。何になろう、そのわけを言ったところで、なぜなら、シャーリプトラよ、驚き恐れるだろう、あの諸天や世間の人々は、このわけを説明されたなら。

ふたたび、長老シャーリプトラは、世尊に願った――

言ってください、世尊よ、言ってください、スガタよ、このわけを。なぜなら、世尊よ、この会衆のなかには、幾百の多くの衆生、幾千の多くの衆生、幾百千の多くの衆生、幾千萬億の多くの衆生がいて、過去の仏に親しみ、智慧があり、かれらは世尊の言葉を信じ、いただき、保つてしよう。

さて、長老シャーリプトラは、世尊に次の偈を述べた――

はっきり話してください、ジナの最上の方よ、この集会には幾千もの衆生がいて、
浄らかにスガタを信じ、尊敬し、理解しましょう、あなたのお説きになる法を。（33）
そのとき世尊は、ふたたび長老シャーリプトラにこう言った――

やめよう、シャーリプトラよ、そのわけを説明するのは、驚き恐れるだろう、シャーリプトラよ、諸天も、世間の人々も、それを説明された時には、高慢になったピクたちは、大きな穴に陥るだろう。

さて、世尊は、そのとき次ぎの偈を述べた――

やめよう、ここで、この法を説明するのは、この知は微妙で、思量を超える。

高慢になった多くの愚人は、法を聞いても、ののしって、理解はすまい。(34)

三たびかさねて長老シャーリプトラは、世尊に願った――

言ってください世尊よ、言ってくださいスガタよ、そのわけを。この集会には世尊よ、わたしのような幾白もの衆生があり、その他、世尊よ、幾百の多数の衆生、幾千の多数の衆生、幾百千の多数の衆生、幾千万億の多数の衆生があり、かれらは世尊により前世でだんだん成熟させられた者で、世尊の言葉信じ、いただき、保つでしょう。かれらにとって、それは長夜に意義があり、有利で、幸福であるでしょう。

さて、長老シャーリプトラは、そのとき次の偈を述べた――

法を説いてください、両足の最高の方。お願いします、あなたの最年長の子どもとして。

ここには幾千万億の衆生がいて、かれらは信じるでしょう、あなたのお説きになる法を。(35)

そのほか、前世で長夜にわたって、あなたが成熟させた多数の衆生も、

合掌してみなここにおり、信じるでしょう、あなたの説かれるこの法を。(36)

わたしたちと同じような千二百人もまた、あなたの無上道へと旅立った者、

かれらをご覧になったうえ、スガタよ、説いて、最高の歓喜をどうぞお与えください。(37)

evam ukte bhagvān āyusmantam śāriputram etad avocāt/alam śāriputra/kim anenāṛthena bhāsītēna /

tat kasya hetoh/uttrasisyati śārīputrāyaṃ sadevako loko 'sminn arthe vyākriyamāne// dvaitīyakam
 apy āyusmāñ śārīputro bhagavantam adhyesate sma / bhāsatām bhagavān bhāsatām sugata etam evār-
 tham / tat kasya hetoh/santi bhagavams tasyāṃ parśadi bahūni prāṇi śatāni bahūni prāṇi sahasr-
 āṇi bahūni prāṇi śata-sahasrāṇi bahūni prāṇi kotī-nayuta-śata-sahasrāṇi pūrva-buddha-darśāvīni
 prajñāvanti yāni bhagavato bhāsitam śraddhāsyaṃti pratīsyanty udgrahīsyanti // atha khalv āy-
 usmāñ śārīputro bhagavantam anayā gāthayādhyabhāṣata //
 vispaśtu bhāṣasva jināna uttamā santīha parśāya sahasra prāṇinām /
 śraddhāḥ prasannāḥ sugate sagauravā jñāsyanti ye dharmam udāhrtāḥ te //33//
 atha khalu bhagavān dvaitīyakam apy āyusmantam śārīputram etad avocat/alam śārīputrānenārthena
 prakāśitenottrasisyati śārīputrāyaṃ sadevako loko 'sminn arthe vyākriyamāne 'bhimāna-prāptās ca
 bhikṣavo mahāprapātāṃ prapatīsyanti//atha khalu bhagavāms tasyām velāyām imām gāthām abhasata //
 alam hi dharmen iha bhāsitena sūkṣmam idaṃ jñānam atarkikam ca /
 abhimāna-prāptā bahu santi bālā nirdiṣṭa-dharmasmi ksipe ajñanākāḥ //34//
 traitīyakam apy āyusmāñ śārīputro bhagavantam adhyesate sma /bhāsatām bhagavān bhāsatām sugata
 etam evārtham/mādīśānām bhagavann iha parśadi bahūni prāṇi śatāni samvidyante 'nyani ca bhagav-
 an bahūni prāṇi śatāni bahūni prāṇi sahasrāṇi bahūni prāṇi śata-sahasrāṇi bahūni prāṇi kotī-
 nayuta-śata-sahasrāṇi yāni bhagavatā pūrva-bhavesu paripācītāni tāni bhagavato bhāsitam śrad-
 dhāsyaṃti pratīsyanty udgrahīsyanti/tesām tad bhaviṣyati dirgha-rātram arthāya hitāya sukhā-

yeti || atha khalv āyusmān śāriputras tasyām velāyām imā gāthā abhāsata ||
bhāsasva dharmam divipādānam uttamā aham tvam adhyesami jyesthaputraḥ /
santīha prāṇīna sahasra-koṭyo ye śraddhāsyaṅti te dharmā bhāsitaḥ || 35 ||
ye ca tvayā pūrvahaveṣu nityam paripācitā satva sudīrgha-rātram /
kṛtāñjali te pi sthitātra sarvae ye śraddhadhāsyaṅti tavaita dharmam || 36 ||
asmādṛṣā dvādaśīme śatās ca ye cāpi te prasthita agrabodhaye /
tān paśyamānaḥ sugataḥ prabhāsataṃ teṣāṃ ca harsaḥ paramaḥ janetu || 37 ||

あ つ ば れ

1000.1.27.

原 田 慶

一月は暖かい日が多かった。スキー場や雪祭りをする地方では、雪が少なくて困っているというニュースをよく聞いた。

今日二十七日は久し振りに強い寒波で、今夕から明日にかけては雪になるという予報が出ていた。書庫を整理していた主人が、その辺にあったらしい白い扇を二本持って来て、「あんた扇子がないらしいから、これ上げようか」という。この寒い時に扇子をあげようというので、「えっ」と言っただけのまま返事につまっていると、「扇子がないとか、このあいだ言うてたやろ」といった。私は思い出した。昨年くれの十二月十八日、甥の結婚式で東

京の露ヶ関ビルまで行った時、着物の帯にはきむ飾りの扇子がなくて妹に借りたのだった。

その時は、朝、京都駅から新幹線で東京駅まで行き、タクシーでビルへ行って、ヒューと三十五階まで上がった。暗くなるまでビルにおいて、窓からパノラマのような東京の夜景を見た。昼は人がいるとも思われない街だったが、灯がついて石の建物が見えなくなると、かえって人の住む所なのだという気がして、温かみを感じたのだった。それからまたヒューとエレベーターで降りたが、その昇り降りの早さにはびっくりする。水の中で手を放されて浮き上がるヒンボン玉と、それが突然水を抜かれて下がるようなもので、まったくショックもないのである。また新幹線に乗って京都に着いたら夜の十一時をすぎていた。タイムカプセルにでも入っていたような不思議な一日だった。

二本の扇の小さい方を開いてみると、

大日本婦人会歌

世界に比なき 日の本の

婦女の徳を 磨きつつ

皇国につくす まごころを

ここに結べる われらの会

という詞が四番まで書かれていた。

戦争中に母が使ったものだろうか、私はこういう歌を聞いたことがない。

他の一本はもう少し大きくて、広げてみたがなにも書いていない。黄ばんでいるが全くの白扇であった。「何も書いてない白扇ですね。何か書かんとあきません、あつばれ、とか」と私が言うと、主人がげん顔をしないで、突然笑い出した。私は何ごとかと思つたが、「あつばれ？ 何があつばれや。よういわんわ。ちつともあつばれなことなんてあらへんがな」と言つてはアハハと笑うのである。

扇を見て、まず私が思ひ出すのは、花咲か爺さんの話で、桜の木に登つたおじいさんが、籠をかかえて灰をまくとみごとに花が咲き、その下で馬に乗つた殿様が「あつばれ」と言つたか「見事である」と言つたか、扇子をかざしている絵である。桃太郎が鬼をやつつけて、ふんどつた宝物を、犬、猿、きじに引かせて、えんやらやと帰ってくる図でも、桃太郎は扇を持っている。それから那須の与市の扇的や、白いたすきの応援団、どれをとつても扇はあつばれである。

亡くなった母に美しい花の絵のついた布張りの扇子をもらつたことがあつた。私が扇子を使ったのはその時だけで、それもとこかへやつてしまった。里の母が高野山で買つてくれた扇子には、金泥で般若心経が書いてある。主人は「こつちは大きすぎであかな。まあ、そつちをあげるわ。そんな歌が書いてあつても開かなんたらどうということもない」と言つて、小さいのを置いて、大きい方は持つていった。

水墨画か、詩歌でも書くための白扇なのかもしれないが、やはり扇は「あつばれあつばれ、あはれはれ」という感じがする。

暗くなつていつのまにか雪が降り出してあたりがまっ白になつていた。やはり冬だったのだなあと思つて、部

屋のガラス窓や縁側のガラス戸のカーテンを押し退けてのぞいてみた。あっぱれ雪は小止みもなくさらさらと降
続いている。

赤

い

鳥

1000. 1. 25.

原 田

慶

昨年の秋は木の実がよくついた。ナンテン、マサキ、アオキ、タラヨウ、実のつき方や姿はそれぞれ異なるけれど、どれも赤くなって、花のない冬の景色によく目だつ。マサキの実ほとんど鳩が食べてしまう。ほそい枝の中に重たそうな鳩がゆっつきりと乗って、赤くなりはじめた頃から、実をこぼしながらどんどん食べてしまう。昨日ふと気がついたら、木にびっしりとついていたタラヨウの実が、しごきとったかのように一粒もなかった。これはヒヨドリである。

赤い鳥 小鳥 なせなせ赤い

赤い実を食べた

という歌がある。ヒヨドリは甘いものが好きで、ツバキの花の蜜などを吸うそうだが、赤い実も好きだという。雪の多かった冬には、墓のお供えのリンゴや菊の花まで食べた。ヒヨドリは灰色がかつた黒っぽい鳥であるが、どこかにえんじのような赤を含んだ気配がある。鳴き方もヒイヒイと長くけたたましく、飛び方もついでと素早い。いつもからだを飛ぶための用意をしているようで、鳩のようにおっとりとはしていない。

歌の続きは、

青い鳥 小鳥 なぜなぜ青い

青い実を食べた

青い実というと、リュウノヒゲやヤブランの実がある。セキセイインコは白、青、黄、緑などの羽をしているが、みんな粟やヒエを食べる。私は二度飼って二度とも猫に籠をひっくりかえされて、インコが逃げてしまった。オオルリなどは青い鳥だが、虫を食べるらしい。

童謡というのは、科学的には何の根拠もないものが多いが、どこかでかかっているようなところがある。

あれ松虫が鳴いている

チンチロ チンチロ チンチロリン

あれ鈴虫も鳴きだした

リンリン リンリン ガーリンリン

ちようちよう ちようちよう

菜のはにとまれ

菜のはに飽いたら 桜にとまれ

というような歌で、虫の鳴き方がちがっていると、蝶は桜にはとまらないなどと言われるが、風景としては

楽しい。

おたまじゃくしに足が出て

手が出てきたら尾がとれた

という歌があつて、ある先生が理科の時間にこの歌でカエルの成長を教えたので、参観に行った親たちがびっくりしたということがあつた。おたまじゃくしは尾がとれるわけではないが、尾がなくなることを、尾がとれたという表現にしているのであろう。

童謡のいっていることが、自然のとらえ方としては、深いところで眞実を言い当てていることもあるような気がする。草木染めの場合、たとえば桃の花のピンクを染めるには、花では染まらないのであつて、その花を咲かせるために樹液をいっぱい貯めた花さく直前の若い枝が、いちばんうつくしく花のもつピンク色を染め出すことができるのだという。赤い実を食べた鳥は、外から見ると黒くても、赤い色を含んでいるのかもしれない。

室生犀星の『動物詩集』のなかには、虫や鳥などのことがたくさん歌われているが、そのなかに「蛇のうた」がある。

あんまり長いので

じぶんの尾もろくろく見たことがない、

春のあたたかい日にあなから出ると

長いあくびをする。

冬は長かつたなあ、

そしてひさしぶりで野山の

きよねんとおなじけしきを見て

やれやれみんなかはらずにゐたなあといふ。

けれども木や草はだまつてゐる、

へびはそこでゆつくりおしつこをして

さてくびをあげ

どこへいつてなにをこちそうにならうと

長い汽車のやうにあるいてゆく。

犀屋さんは蛇がおしつこをするのを見たわけではないだろう。私は蛇があくびをするなんて考えたこともなかった。学校で二年生の子どもたちに読み聞かせてみたが、都会の子どもたちは、この詩をおもしろいと思わならしい。草原や水田を渡って行く蛇に出会ったことのない子どもは、「蛇のうた」にそれほど関心を示さなかった。

今年はまだ白いめがねのメジロが来ない。ピワの花があまり咲かなかったからだろうか。花の蜜や、木のあま汁がすきだというメジロは、寒い冬には早くから庭にきて、ピワの花のまわりをくるくるまわっている。オリーブ色の小さな鳥だが、やはりどこかに赤味を含んでいるように見える。